

『西行物語』の享受方法

— 岡部における西行西住伝承 —

蔡 佩 青

はじめに

西行が生涯に二度、陸奥を旅したことは、彼の家集『山家集』によって確認されている。しかし、西行没後五十年も経たぬうちに流布し始めたと言われる『西行物語』では、陸奥への旅は西行の生涯一度きりとされ、その旅は、西行にとって最も峻厳な修行の旅であったと位置づけられている。『西行物語』は夙に「西行名歌集」と称されているように、西行歌を取り入れながら西行の伝記を綴っていく創作方法を有している。ところが、西行の東下りの「場」となる東海道での記述は、西行歌を用いないで記されたり（天竜渡り受難事）、物語編著者の創作歌によって創り出されたり（岡部宿同行死去事）している。

本稿では、西行が岡部宿で同行の死に遭遇する挿話を中心に、『西行物語』諸本の描写の異同を検討しつつ、現在岡部町に伝わっている西行・西住伝承の方法を考え

たい。

一、『西行物語』の諸本分類

『西行物語』の諸本については、早くから伊藤嘉夫氏、坂口博規氏、千野香織氏、高城功夫氏、礪波美和子氏等によって、各伝本の成立とその前後関係や、先行説話との伝承関係などが解明され、定説化をみている。^{〔注〕} 主な『西行物語』伝本は「広本系」「略本系」「采女本系」「永正本・寛永本系」のように分類されている。広本系と略本系は、物語の分量及び文章の類似によってまず分けられている。また、それとはまったく異なる構造を持ち、絵巻として江戸時代に大量生産された采女本系があり、そして、広本系と略本系のそれぞれの特徴を示す挿話を併せ持ち、さらに独自の西行説話を有する、所謂中間本系の永正本・寛永本系がある。最後に、以上のいずれの分類にも該当しない、肥前島原松平文庫所蔵本と学習院

大学日本語日本文学研究室蔵本があり、これらは差し当たり「松平本系」と呼んでおくこととする。^(非2)

これらの分類のなかで、広本系と略本系は、他伝本に比べ物語の構成が整っており、成立時期も早いとされるため、『西行物語』における西行像を検討する際にはこの両伝本を用いることが多い。広本系と略本系との最大の相違点は、西行出家後の吉野・熊野・大峰への旅の記述の有無にある。

西行の陸奥への旅の経路を見ると、左記の図に示すように、西行は東国へ旅立つ前にまず伊勢神宮に参詣した。次に東海道に入り、遠江国、相模国、武蔵野という順で陸奥国に至った。さらに細かく地名を辿っていくと、例えば広本系においては、遠江国の天竜川を渡り、小夜の中山・宇津山・清見が関を越え、さらに足柄山を越えて初めて相模国の地名が記される。いわば東海道は、西行の東下りの最も重要な場所として設定されていると言えよう。一方、略本系における西行の東海道の旅は、広本系と異なる物語の様相を見せている。即ち、小夜の中山と宇津山の間には岡部宿が挿入され、西行は天竜川を渡った後に、駿河国岡部宿で同行の死の消息を聞かされることになっているのである。

【西行の陸奥への旅の経路】

(広本系)

吉野山↓大峰↓津の国↓太神宮↓東国(遠江国)、相模国、武蔵野、陸奥国)↓都

*東海道:天竜の渡り・小夜の中山・宇津山・清見が関・

足柄山

(略本系)

太神宮↓東国(遠江国、駿河国、相模国、武蔵野、陸奥国)↓都

*東海道:天竜の渡り・小夜の中山・岡部の宿・宇津山・

清見が関・足柄山

二、同行の死に遭遇する西行

『西行物語』において、西行が出家を決意する際に四歳になる愛娘を縁の下に蹴落とした場面を、物語のクライマックスとするならば、天竜川の渡りで武士に鞭で頭を打ち割られた事件は、物語中で最もドラマチックなエピソードということになる。西行は、同行の入道とともに天竜川の渡りで大勢の人が乗った船に便乗したところ、乗り合わせた武士に船を降りろと命じられたものの、渡船場の習いと思つて降りなかったため、鞭で頭を叩かれ血を流す羽目に陥った。同行の入道が見て悲しむ様子

に、西行は修行の真義を教訓し、同道を拒否し入道と別れて独りで旅を続けた。

そのあとに、略本系『西行物語』には次の独自の挿話
が加えられている。

笠はありその身のいかに成ぬらん あはれはかなき
雨のしたかな

(久保家本『西行物語』)

只独り、嵐の風身にしてみても、うき事いと大井河、しかひの波をわけ、涙も露もおきまがふ、墨染の袖しほりもあへず行程に、するがの国、岡部の宿と云ふ所に付きて、あはれたる御堂に立寄り、やすみて居たりけるに、何となく後ろ戸の方を見やりたりけるに、ふるき檜笠のかけられたるを、あやしと見に、すぎにし春の比、都にて、たがひに、先立、ば、(a)還米穢国、最初引摺の契をむすびし同行の、東の方へ修行に出し時、あながちに別れを悲みしかば、此を形見にとて、我不愛身命、但惜無上道と書きたりしが、笠はありながら、主は見えざりければ、おくれ先立ならひ、はやもとのしづくと成りにけるやらんと、哀れに覚へて、涙をおさへて、宿の者に問ひければ、京より、此春、修行者のくだりてありしが、此御堂にて、いたはりをして失せ侍りしを、犬の喰ひみだして侍りき。かばねは近きあたり侍るらんと言ひければ、尋ぬるに、見えざりければ、

西行はただ独りで東国に向かう途中、駿河国岡部宿にある荒れた堂に立ち寄って休んでいたところ、春の頃に都で互いに浄土往生の先達となる約束を交わした同行の笠がかけられているのを発見した。笠は形見として同行に渡したものである。しかし同行はすでに旅の疲労で亡くなっており、屍が犬に食われ跡さえ残っていない、と宿の者に聞かされたという。このくだりは、広本系に属し『西行一生涯草紙』の名を持つ伝本と、それと同系統のテクスト(以下、一生涯草紙と称す)を除き、広本系には見えないため、略本系が成立する際に挿入したエピソードであると考えられる。

秋谷治氏は、これまでの永正本と寛永本を一括して永正本・寛永本と分類する仕方に疑問を持ち、〈岡部宿同行死去事〉を含む諸伝本に共通する本文を比較したうえで、寛永本には一生涯草紙に近似している詞章及び挿話が多々あることから、『西行物語』の原型を考えるうえで看過できない一伝本であることを指摘した。^(注4) 寛永本『西行物語』は、岡部宿同行死去の事を次のように描写

している。

西行只一人、嵐の風身にしまひて、憂き事いとゞ大井川の四海の浪を分て、やそせのみわたる袂しほりあへずして、駿河国岡部の宿に、古堂に立寄て、休つ、後戸の方様を見れば、古檜笠の掛られたるをあやしと見れば、過ぎぬる春、都にて、(b)一蓮の上にと、契を結たりし同行の、東の方へ修行に出し時、あながちに別を惜しかば、是を形見にみよとて、我不愛身命、但惜無上道と書たりし笠也。主は行方もみえざりければ、心うくて、をくれ先立ためし、末の露もとの雫と消ける哉らんと泪もとゞまらず、宿の人に尋ぬれば、此春修行者の下だりしが、其堂にて、世心ちをして失にしを、犬喰散て侍りきと、云ば、かばねは有らんと云、尋ぬれ共、無りければ、笠はあり其身は如何に成ぬらん 哀はかなきあめが下かな

(寛永本『西行物語』)

「この記事は一生涯草紙や寛永本が増補したのではなく、甲類にも本来存したと考えるべきなのであるまいか」と、秋谷治氏は推測している。ここで言う甲類とは広本

系を指している。そうだとすると、略本系における〈岡部宿同行死去事〉は広本系より伝承されたこととなる。しかし、ここで注目したいのは、寛永本も一生涯草紙も略本系とさほど変わらぬ内容を伝えているのに、傍線部(a)と(b)にあるように、西行と同行との間に交わした契りについての記述表現に相違が見られることである。即ち、略本系の「還来穢国、最初引撰」の漢文的(経文的)表現に対し、寛永本と一生涯草紙は「一蓮の上」として現している。従つて、〈岡部宿同行死去事〉に関しては、略本系と、一生涯草紙・寛永本・永正本とに分かれて伝承されていると考えたい。

一方、かつては阿仏尼筆と伝えられていた静嘉堂文庫本『西行物語』では、西行の岡部で発見した笠は、「同行西住」の形見とされている。

岡部の宿といふところに付きて、あれたる御堂に休みるけるに、

我不愛身命 但惜無上道

と書たりし笠あり。見れば同行西住が笠也。笠はあれども、主は見えざりければ、あたりの人にとふ。答へて、この春、修行者のくだりてありしが、この

御堂にて、いたはりをして失せ侍べりしを、犬の喰
いみだして侍りき。かばねは近きあたりに侍べらん
と言へば、尋ぬるに見えず。

かさはありその身はいかになりぬらん あわれ
はかなきあめのしたかな

(静嘉堂文庫本『西行物語』)

『西行物語』諸本において、笠の持ち主の名が記され
ているのは、この伝本だけである。その上、その名は、
『山家集』にもしばしば登場し歴史上の西行の生涯の友
である西住と明記されている。本来、該当する描写は物
語の展開を左右するほどの改編となるうが、『大般若経』
の紙背を用いての書写のため紙数の制限を受けており、
「省筆甚しく、改竄されている疑い」があり、^(注8)「前半の西
住出家に付けあわすべく、あえてその最期を同行客死の
話に求めようとした意図が明らか」である、と指摘され
ているように、西住の再登場はそれほど重視されていな
いのである。しかしながら、本文批判の立場からは当然
のことであっても、説話が流布する際には、テクストの
改編の経緯に意識が向かず、ただ記述のままに語り継が
れていくこともある。即ち、静嘉堂文庫本『西行物語』
に記されたような、岡部宿で亡くなった修行者が西住で

あることを契機に、今に残る岡部に伝わる西行・西住伝
承に繋がっていくのである。

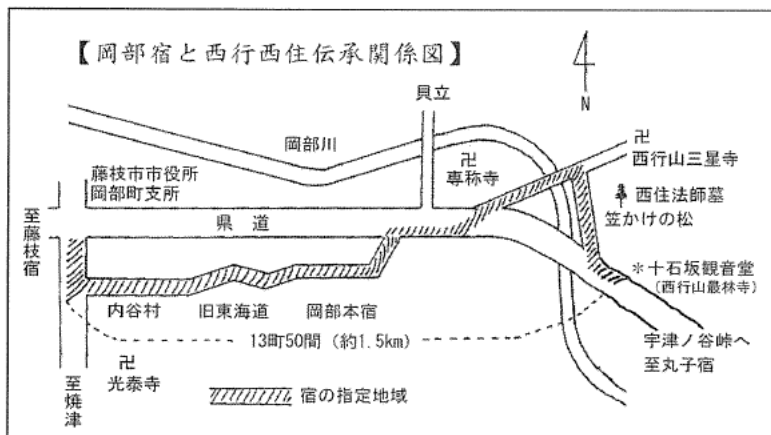
三、岡部における西行西住伝承

現在、静岡県藤枝市岡部町にある小さな丘、岩鼻山の
頂に、西行笠懸松と西住法師墓が存している。旧東海道
沿い、岡部宿の中心部よりやや離れたところにある。ま
た、麓に西行山と号する曹洞宗の寺院、三星寺がある。
三星寺の開創について記されている古文書によると、三
星寺の草創縁起は不詳であるが、西行が諸国行脚の折に
立ち寄った場所であり、また弟子西住の臨終の地でもあ
ることから西行山と号したという。^(注9)更に、岩鼻山自体が
西行山と呼ばれる記録も見られる。^(注10)

その他、岡部宿の東の終わりを示す十石坂観音堂と、
西住法師墓近くにある専称寺も、西行ゆかりの地とされ
ている。「岡部宿と西行西住伝承関係図」に示すように、
岡部町に伝わる西行・西住の伝承のハ場は、小夜の中
山の次の難所である宇津ノ谷峠の前に集中している。

十石坂観音堂はかつては西行山最林寺と号し、西行の
念持仏とされる千手観音菩薩像が本尊として安置されて
いた。のち、柑本昌基(南浦)が奉納した西行の坐像が
納められ、千手観音菩薩像とともに岡部町有形文化財と

*本図は、『藤枝・岡部のあゆみ』に収録されている「岡部略
 図」(P7)を増補して作成した。^(注1)



して指定された。^(注1)ところが、最林寺は明治時代に廃寺となり、観音堂のみ残され現在に至る。千手観音菩薩像は約三十年前に盗難に遭い所在不明のままであり、西行坐像は現在専称寺に安置されている。

岡部における西行西住伝承について、書物によって異なる内容が伝えられているが、いずれも『西行物語』に基づき、岡部という伝承空間と密接な関係を持つ素材が付加され構成されている。次に掲げるのは天明六(一七八六)年秋起草の『東街便覧図略』に記されているものである。^(注1)

西行笠掛松

岡部の宿を過て宇津の山にかゝる左の片山の上に西行の笠懸松といふあり。里人伝て云ふ。むかし西行法師爰に山居ありしが、最林といへる弟子を此所に残し置て又修行の旅に趣んとする時、最林ふかく師の別れを悲しみしかは則、着るところの笠を此松の枝にかけて是我姿を留る也と有し。其古跡なりとそ。辺り近き西行観音堂より出板の絵図には法師の歌とて、

西へゆく雨夜の月やあみた笠 かげを岡辺の松にのこして

とあり。又西行物語に云く。

駿河の岡岡部の宿といふ所に付きて、あれたる御堂に立ち寄り休みて居たりけるになにとなくうしろのかたを見やりたりけるに、古きひ笠かけられたるをあやしと見るに、過し春のころ、都にてたがひにさきたゝは還来穢國。最初引撰のちぎりをむすびし同行のあつまのかたへ修行に出し時、あなかちにわかれを悲しみしかは、

笠はあり其身はいかに成ぬらん

あはれはかなき雨のしたかな

此二説大同小異なり。何つれにも西行の旧跡なるべし。(以下略)

杉森 西行観音堂

西行山最林寺と号す。本尊千手観音は、西行法師の持念仏にして、弟子さいりん建立の地たりといふ。(以下略)

『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』

ここに伝わる西行の同行は、西住ではなく最林という名の弟子である。また、西行観音堂はさいりん＝最林の建立とし、西行の詠歌が納められているという。しかし、

「西へゆく」の歌は『西行物語』に存せず西行や西住の詠歌でもない。観音堂や岡岡部宿に伝わる伝承歌か、あるいは『東街便覧図略』作者による創作歌かもしれない。該当歌は現在岡岡部町において西住の歌として伝承されている。^(注12) 記事に引用された『西行物語』は略本系の久保家本に酷似している本文であるが、物語中で西行が同行の死に遭遇した際に詠じた「笠はあり」の歌は、ここでは同行と都で別れた際の詠歌としている。

『東街便覧図略』は、尾張藩士高力種信が東海道を旅して描いた尾張から江戸までの道すがらの絵図である。当時はすでに西行笠懸松と西行念持仏が伝わっており、最林の名は観音堂の寺号に因んで伝承されたのであろう。西行(西住)の伝承歌と遺失した千手観音菩薩像の由来については、文献資料が少ないため、今後の課題としてなお調査を続けたい。

一方、現在岡岡部町に伝わる西住法師墓については、岡岡部町史、静岡県史をはじめ公的記録の殆どが、次に掲げる、江戸後期に製作された『駿河記』の記した「桑門西住事状記」によるものである。

桑門西住事状記曰

桑門西住者姓名某。武衛校尉佐憲清^{一作義清也}家臣也。保延三年八月。同其主脱世絆。而改名西住。

(中略)

乃從西行東遊。芭鞋竹箆飄々乎與往。及至于遠之
天龍川。偶與武人同舟渡。舟中人多而殆將飄覆。
武人呼曰。僧等下。西行謂。得便船者豈非雲水之
常乎。因不肯下。一人突然以鎗毆西行。血淋漓染
衣。西行自若無憤怒之色。徐々下舟。西住乃勃然
起色。勦聲一呼。以錫杖擊乎其面。卒隸驚駭。不
能敢當。狼狽而走。西住猶追逼之。杪者為禁紛擾。
走者倅稍定。西行進謝曰。野弟不遜之為。實出卒
意。敢望恕宥。於是敵者諦視其骨相不凡。辭氣溫
雅。無復爭鬪事一以解。西行天龍之難。其事詳于
西行発心記。既而西住從西行絶堰水。跋涉漸遠。
羸蹇之餘。中途得痾遂卒于岡部里傍山翠微中。

(中略(c))

實延保三年九月廿八日也。西行訣西住和歌。及寂
然弔詞。並所載千載集者如左。
千載集卷第九哀傷哥

同行の上人西住秋の頃わづらふことありて
かぎりに見て侍ければよめる

圓位法師

もろともにながめながめて秋の月、ひとりにな
らむことぞ悲しむ

西住法師身まかりける時、をはり正念なり
けるよしを聞、圓位法師のもとに遣し侍る。

寂然法師

みだれずと、をはり聞こそうれしけれ。さても
別はなくさまねども、かへし

圓位法師

此世にてまた逢まじきかなしさに、すゝめし人
ぞ心亂れし、

里人為葬之。築墳建碑。以識其處。碑蓋辨形。今尚書崩。

嚴然存焉。後人過者莫不欽英風也云。(中略(d))

吁人去境留。久之境亦將煙没焉。獨不朽者名而已。
以名繫境。記而傳之。庶乎其不朽矣。

元文元年丙辰八月十五日

東都南浦柑本昌基撰

甲斐信濃守從五位下源光章書

此事狀記は内谷杉山氏所藏なり。

『駿河記』

*中略部分は『駿河記』編纂者の私注の部分である。また、歌
に付した句読点はテキストのままである。

『駿河記』は、文政三(一八二〇)年に成立した駿河
国の地誌である。その前身には、文化九(一八一二)年

に駿府奉行服部久右衛門貞勝によって企画された『駿河大地誌』がある。『駿河大地誌』の編纂時に各郡の調査担当者が相次いで亡くなったため、志太郡を担当した桑原藤泰（黙齋）が最後まで独力で調査を終え、完成させた原稿を『駿河記』と名を改めた。右に引用した記事は「西住法師之墓」の条に収録されているものである。記事の末尾に「此事状記は内谷杉山氏所蔵なり」とあるように、西住伝承は杉山氏が所持する資料より転写したものである。漢文で記されたこの伝承は、『西行物語』の伝えている西行の天竜渡り受難の事を物語の中心としている。ただ、『西行物語』では天竜の渡りで西行と同道したのは「同行の入道」と記されているのに対し、「桑門西住事状記」では西住となっている。そして、武士に叩かれた西行を見て、西住はただ悲しく見守るばかりでなく、直ちに顔色を変え錫杖を以て反撃し、武士の顔を殴ってなお追おうとしたところ、西行の誠心誠意の陳謝によって事件が解決されたという、『西行物語』に見られない劇的な展開をしている。更に、西住は西行と大井川を渡り、岡部に至って病となり「延保三年九月二十八日」に死去したという。

西住の没年について、「延保」という年号は存在しないが、『吾妻鏡』は西行の出家時期を保延三年八月とし

ているため、そこから連想し創作したものである。仮に「延保」は「保延」の誤りだとしたら、「桑門西住事状記」の冒頭に書かれた保延三年八月に西行とともに出家したという記述と照らし合わせると、西住は出家後にすぐ東下りをし、同年九月末に亡くなったということになる。無論、西行の出家と西住の死去の年紀については、いずれも史実と合致して^(注)いない。

しかし興味深いことに、『駿河記』の記事は単なる編者による資料収集・転写のみで完結したものではない。編者が書きとめた註記の部分も故事の一部となって伝承されていくのである。例えば上記の引用文中の中略(c)には、『吾妻鏡』の記した西行と源頼朝が鎌倉八幡宮で対面した名場面についての言及がある。『吾妻鏡』において、頼朝が歌道と弓馬の事を尋ねたところ、西行は、自分は遁世時に兵法の書を焼き捨てた身であり、和歌も興義までは知らず、ただ興に従い詠歌する程度だと返答したことが記されている。他方、『駿河記』は西住を引き出すためか、二人の対話に「譚餘及天龍之難。西住尚不能忘節義」を付け足し、「幕下聞而壯之」と西住の言動に対する肯定的な評価まで記している。

加えて中略(d)は、「一説」として『西行物語』のごとく二人は天竜川の渡りで別れたと伝えている。但し、こ

ここにもまた次に挙げるように、独自の物語を展開している。

於是西住皇々焉如兒失慈母。悲歎愁絶將不自勝。有池田長者。為謂之曰。子行事固不為無理。然師命而違之可乎。西住曰。今辱見開論。敢不受教。某荷師恩有年矣。然未嘗一有違一其命。而今適如此。是吾命窮盡之時。為人之臣僕苟背主命。不死何持。乃欲自裁。而懼其非縉徒行。且似果於怨者。於是飄然將追及其師

池田長者回答。詳于熊野寺僧錄。

『駿河記』

傍線で示したように、西住は西行に同行を拒絶された後、幼き子の母を慕う如く嘆き悲しんだところ、池田の長者に慰められたが、師西行の意思に背いたことは死を以て謝罪するほかないと思ひながら、僧侶の身分を案じ遂に西行の行方を追ったとある。また、このことは「熊野寺僧錄」に詳しく記載されているという。岡部宿近くにかつては熊野の地名があり、『駿河記』によって「熊野権現社」の存在が確認されているが、現在は廢寺となり、「熊野寺僧錄」との関連は不明である。池田とは天竜川の左岸にある池田宿のことであろう。天竜川の渡り

で西住が武士と争ったことについて、謡曲「西行西住」にも類似した場面は見られるが、池田長者の挿話は岡部独自の西住伝承である。

「桑門西住事状記」を記録した柑本昌基と、本記録を所蔵している杉山氏とが交友関係を持っていたことは杉山家に伝わる『杉山雜記』によって確認できる。(杉山)『杉山雜記』は岡部宿在住の杉山忠右衛門が記録した杉山家の記録書である。その中、「桑門西住一軸之事」の条に、柑本昌基が義父仁山居士に贈与した「桑門西住事状記」は焼失したが、文化六（一八〇九）年に書き写しを発見し、家宝として珍重していることが記録されている。しかし、杉山家が岡部を離れた現在、「桑門西住事状記」は所在不明となったのである。

また『駿河志料』には、『駿河記』記事の要約が仮名文によって再録されており、頭注には「本文は元文中江戸人柑本昌基が真名文にせ記しを、里人通世が假字に記せし鑑擧ぐ」とある。(注)通世とは河野菰園のことであり、『駿河大地誌』編纂時に益津郡の調査を担当した人物である。十石坂観音堂境内に杉山佐十郎が建てた「河野菰園碑文」が現存している。そのため、河野菰園と杉山家とは交流があると考えられ、河野菰園によって杉山家が所持する西住伝承が伝わったとも考えられる。『駿河記』

に記されている「桑門西住事状記」は、恐らく河野菼園の調査によったものである。あるいは桑原藤泰が『駿河記』編纂のための再調査をした際に、改めて「桑門西住事状記」の書き写しを確認し記録したかもしれない。いずれにせよ、柑本昌基については、生没年が不明であるが、「桑門西住事状記」を著したのは元文元（一七三六）年であることを踏まえて年齢を推算しても、河野菼園と桑原藤泰との両者と接点を持っていたように思われない。従って、現在『駿河記』やその他の地誌に書き記されている西住伝承は、杉山家を介して伝わったものだと考えてよからう。

なお、現在専称寺に安置されている西行坐像は、底部の銘文によって柑本昌基が享保十一（一七二六）年に奉納したものであることが分かる。^{（作位）}そして、「桑門西住事状記」を清書した甲斐信濃守源光章（一七一一年―一七八二年）の、その名は寛政二（一七九〇）年刊の『近世畸人伝』に見られ、『甲斐名勝記』の天明二（一七八二）年に記された序文の撰者でもある。

四、西住の死

以上のように、岡部町に伝わる西住法師墓の伝承は、『西行物語』における岡部宿同行死去の事が増補・改編

されて作られた、後世による新たな西住伝承である。一方で、西住の死を伝える説話は、早くも十三世紀中期の成立とされている『撰集抄』において創出されている。『撰集抄』は、『山家集』に収録されている寂然と西行の贈答歌を素材にし、西住の最期を見届けた西行がその遺骨を高野山に納めたことを記している。

同行に侍りける上人、終りよく思ふさまなりと
聞きて申し送りける

寂然

乱れずと終り聞くこそうれしけれさても別れを慰ま
ねども

返し

この世にて又逢ふまじき悲しさに勧めし人ぞ心乱れ
し

とかくのわざ果てて、後の事ども拾ひて、高野
へまゐりて帰りたりけるに

寂然

入るさには拾ふ形見も残りけり帰る山路の友はなみ
だか

返事

いかでとも思ひ分かず過ぎにける夢に山路を行く心地して

『山家集』八〇五(八〇八)

『山家集』が記した「同行に侍りける上人」は即ち西住である。桑原博史氏は、西行が西住をしきりに「同行に侍りける上人」と呼んでいる理由は、「自分より先立つた西住に対する哀惜の念」であるのみならず、宗教者としての西住は、「西行をリードしている面があったのではなからうか」と指摘している。^(非切) それならば、西行と西住の二人の関係をいち早く理解し説話化したのは、『撰集抄』の作者とも言えよう。『撰集抄』には、西住の死について次のように描かれている。

西住聖人、わづらいの事侍りと聞きしかば、今は限りの対面もあらまほしく覚えて、高野の奥より都に罷り出でて、聖のいほりに尋ね行きて見侍れば、事の外におとろへて、はかばかしく物もいひやらぬ。

我をうちみて、嬉しくとて涙ぐみし事の哀に覚えて侍りて、そゞろに涙を落し侍りき。閑居のつれづれをば、我こそなぐさめ申すに、そののひとり残り給ひて、いかにおほくなげかむとて、袂をしほり侍れば、

たゞあわれさ身にあまりて、其の夜は留まりて、よろづひまなく、後のわざなど聞えしかば、さり共、やがて事はきれじとこそ思ひ侍りしに、其の暁、西向きて念仏して終りをとり侍りき。今の別れは実に悲しく侍れ共、一仏浄土の再会はさり共と、心をやり侍りて、涙をおさへて、最期の山送りして、泣く泣く煙となし、骨を拾ひとりて、高野にと心ざし侍りき。

(松平文庫本『撰集抄』巻六第四話)

〔西山上人事 ^(西住死去事母)〕

この説話では、『撰集抄』の語り手西行(以下、〈西行〉と示す)が、ただ泣く泣く西住の最期を見守ったように受けとられがちであるが、往生者の遺骨を高野山に納めることは浄土へ導くための結縁であると、傍線部により読み取れる。同巻第八話にも類似の挿話が記されている。

我、世を背きて広く国々を経廻りしに、貴き人々あまた見侍りしかども、かゝる人にいまだあはず侍りき。さても、最後臨終にもあひ、煙ともなし奉り、骨を拾ひ高野にも攀ちのぼり、彼聖たちの筆の跡を

もとり留め、歌をも詠じ侍れば、定めて彼二所の力にて、我も浄土へ道びかれ奉らんと覚えて、嬉しく侍り。

(松平文庫本『撰集抄』巻六第七話「佐野渡聖事」)

西住の場合は、『山家集』が記した詠歌事情を素材にしたことは容易に推測できる。また、佐野渡聖の挿話は、『西行』と二人の禪僧との出逢いを語り、高野山納骨が『西行』を浄土へ導くための結縁の手段であると記している。それに対し、略本系『西行物語』が描いた同行(西住)は、作中で西行が唯一遭遇した往生者でありながら、遺骨が見付からなかったため納骨もされることがなかったのである。あるいは西行の東下りの途次であるゆえ、物語編著者はあえて納骨の場面を設定しなかったのかもしれない。その代わりに、形見の笠を素材にした創作歌を結縁の手段として用意することになった。更には言えば、天竜川の渡りで同行の連立ちを拒絶した西行の、「ただ一人、嵐の風身にしてみても」流離う修行者のイメージを造形するためであったろう。

おわりに

天竜川は、東下りの際、難所小夜の中山を越える前に

必ず渡る川である。時代は下るが、天正三(一五七五)年二月十六日の「徳川家康朱印状写」によれば、天竜川池田渡では船が遅いために船頭を打擲することが禁じられていたという。^(注18) 略本系『西行物語』においても、西行が武士に降りよと命じられた時、「渡りの習ひ」と思い、聞き入れなかったため鞭で打たれた様子が描かれている。そして、小夜の中山を越え、次の峠^{||}宇津ノ谷峠を登る前に、しばしの休息が必要となった、そこが岡部宿である。西行が岡部で同行の死に遭遇したことは、『撰集抄』が描いた世捨て人の発見者としての『西行』の姿を髣髴とさせる。『西行物語』と『撰集抄』との成立の前後関係については未だ解明されていないが、『中世西行伝』の編成を目的とする創作意図は、両書に共通しているであろう。

『西行物語』は書写・流伝される段階で、それぞれの書写者(編著者)によって理想的な西行像が創り出されている。それは、物語を享受する後の文芸に豊富な素材を提供した。天竜渡り受難の事と岡部宿同行死去の事を同時に取り入れた謡曲「西行西住」はその好例であろう。岡部に残された笠は西行の手跡が書かれた形見である、という『西行物語』の設定は、巧みに利用され謡曲中の重要な道具となった。そして、「桑門西住事状記」や、

それを転写・伝承する作品『駿河記』のごとく更に独自の伝承が生み出されていった。岡部に伝わる西行笠懸松と西住法師墓の故事伝説は、実に多種多様である。その大半は中世の西行説話を享受しながら更なる劇的効果をもたらす内容となっている。例えば、西住の武士に対する反撃の行動や、池田長者の西住に発する忠言、西行と頼朝との対話などがそれである。

日本各地に伝わる西行伝承の多くは、西行はその地に立ち寄っていないが、西行歌ないし西行伝承歌が機縁となって形成されたのに対し、岡部における西行西住伝承は、西行説話を踏襲しながらも大きく逸脱せず、物語とその発生の舞台を重視して伝承している。その意味では、岡部の伝承は本来テキストの空間と説話の骨子を壊さずに語り継いでいることによって、中世説話の世界との隔たりを最小限に保つことができたと言えよう。岡部における西行西住伝承は、単なる文献上の一資料として書承されるにとどまらず、口承伝承として地域全体が受け継ぎ伝播していくことに意義を見いだすものである。西行の東海道の旅については、これまでの『西行物語』研究において殆ど言及されていなかったが、物語編著者が西行伝承歌を創作してまで創り上げた岡部説話は、西行伝承研究や中世西行説話の受容を考えるには看過できない

いばかりでなく、略本系の成立過程の究明にも繋がる糸口ではないかと考えられる。

文学研究の多くは、文献資料の操作を通してテキストを解釈する手法を用いている。ただ、文献の性質によっては限界が感じられることもある。こうした現地調査を踏まえつつ再び原典を読み直すことで、作品に秘められている解読のヒントを改めて発見し、古典の現在におけるあり方を再認識する可能性が拓けてこよう。

注

- (1) 伊藤嘉夫「西行物語のたねとしくみ」(『跡見学園国語科紀要』第十二巻、一九六四年三月)。坂口博規「西行物語」の成立時期をめぐって―絵巻と物語の関係を中心に―(『駒沢大学文学部研究紀要』第三十四号、一九七六年三月)。同氏「西行物語」考(『駒沢国文』第十三号、一九七六年二月)。谷口耕一「西行物語の形成」(『文学』Vol.46、一九七八年十月)。久曾神昇「西行文献叢刊解題」(『西行全集』一九八一年、ひたく書房)。千野香織『日本の美術 Vol.416 絵巻西行物語絵』(二〇〇一年、至文堂)。高城功夫「西行の研究―伝本・作品・享受―」(二〇〇一年三月、笠間書院)。礪波美和子「西行物語」諸本について(『人間文化研究科年報』第十一号、一九

九六年三月。

- (2) 両伝本の本文は非常に近似しており、内容については、凡そ広本系『西行物語』に沿っているが、各挿話は細部が大幅に増補されている。また、略本系にのみ収められている歌があり、西行家集や撰集による歌とエピソードの挿入も見られ、いずれの伝本とも異なる内容が伝わっている。なお、『蒙求和歌』に見られる漢籍故事が多く取り込まれている。

- (3) 二〇〇〇年三月二十六日の朝日新聞で徳川美術館本『西行物語』における西行の娘を蹴落とす場面が「クライマックス」として紹介してあったのに対し、千野氏は「物語のほんの序盤に過ぎないこの絵8（稿者注、徳川美術館所蔵本「西行物語絵巻」第一段）に対して、過剰な反応をしてしまうのだ」と述べている（前掲注(1)千野香織氏著書）。

- (4) 秋谷治「寛永本『西行物語』考―『西行物語』原型を探る―」（『一橋論叢』八六巻五号、一九八一年十一月）。
- (5) 前掲注(4)秋谷治氏論考。

- (6) 山口真琴「享受と再編―『西行物語』の伝流と形成―」（『西行説話文学論』二〇〇九年八月、笠間書院）。

- (7) 岡部町出身の大石美代子様より頂いた「三星寺開創備考」のコピー資料によった。

- (8) 『修訂駿河国新風土記』（新庄道雄、一九七五年、国書刊行会）には次のように記されている。「西行山 この山の上に松樹あり、樹下に西住法師の墓とて五輪を建、松を笠掛松と唱す、三星寺の東凡登」。

- (9) 『藤枝・岡部のあゆみ 中学校社会科郷土資料集 改訂版』藤枝・岡部教育研究会社会科部、一九九六年三月。

- (10) 西行法師坐像は昭和四十七年七月一日に文化財と指定された。また、前掲注(9)によると、千手観音菩薩像は室町末期の作品であるという。

- (11) 『東街便覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』（宮本勉翻字・解説、一九九四年十二月、羽衣出版）の解説によると、作者高力種信（猿猴庵）自身の凡例では本書は天明六（一七八六）年の晩秋に行った旅中の隨筆だと記されているが、完成した時期は寛政七（一七九五）年説が有力であるという。

- (12) 『岡部のむかし話』（静岡県志太郡岡部町教育委員会、初版一九七八年）には「西住笠懸けの松」として岡部における西行西住伝承が取り上げられている。そこでは、「西へゆく」の歌は西住が臨終時に笠に書き残した歌としてある。また、現在岩鼻山の麓に掲げる案内も同じ内容である。

- (13) 西行の出家時期については、『台記』永治二年の条に記

されている保延六（一一四〇）年十月十五日であることが定説とされている。また、西住の死は『山家集』によって嘉応元（一一六九）年以降とされている（『山家集／聞書集／残集』和歌文学大系脚注によった）。

(14) 岡部宿『杉山雜記』（翻刻）（藤枝史叢書16、二〇一二年三月）。

(15) 中村高平『駿河志料（一）』（一九六九年三月、歴史図書社）。

(16) 西行坐像の底部に次のような銘文がある。「柑本南浦寄附 肯丙午仲秋 東都湯臺社西住主 山口長保藤原光良 彫刻之」。

(17) 桑原博史「二人の西住」〔西行とその周辺〕一九八九年二月、風間書房）。

(18) 『静岡県史 資料編8 中世四』静岡県編集発行、一九九六年三月。

※本文引用は、久保家本『西行物語絵巻・詞書』、静嘉堂文庫本『西行物語』、松平文庫本『撰集抄』は『西行全集』（日本古典文学会）、寛永本『西行物語』は前掲注（4）秋谷治氏論考、『山家集』は和歌文学大系21『山家集／聞書集／残集』（二〇〇三年七月、明治書院）、「西住桑門事状記」は『駿河記』（一九七四年、臨川書店）、『東街便覧図略』は『東街便

覧図略 伊豆・駿河・遠江の部』（一九九四年十二月、羽衣出版）に拠った。但し、私に適宜表記を改めた箇所や、傍線・注記等を施した箇所がある。

〔付記〕

本稿は、第三十五回国際日本文学研究集会（平成二十三年十一月二十六、二十七日 於国文学研究資料館）における口頭発表『『西行物語』の方法―東海道を歩む西行―』を基に、爾後の研究内容を書き加えたものである。発表の席上及び発表後に御教授を賜りました諸先生方に御礼申し上げます。

また、本研究を進めるにあたり、殊に実地調査を行う際、池谷圭次様（駿河国田中城跡保勝会会長・前岡部町教育委員会社会教育指導員）、藤枝市郷土博物館・文学館学芸員海野一徳様、大石美代子様をはじめ、岡部町の方々から有益なご教示及び多大なるご協力を賜り、専称寺に取材と貴重な文化財の撮影を許諾して頂きましたこと、深く感謝いたします。

（さい はいせい／静岡英和学院大学専任講師）